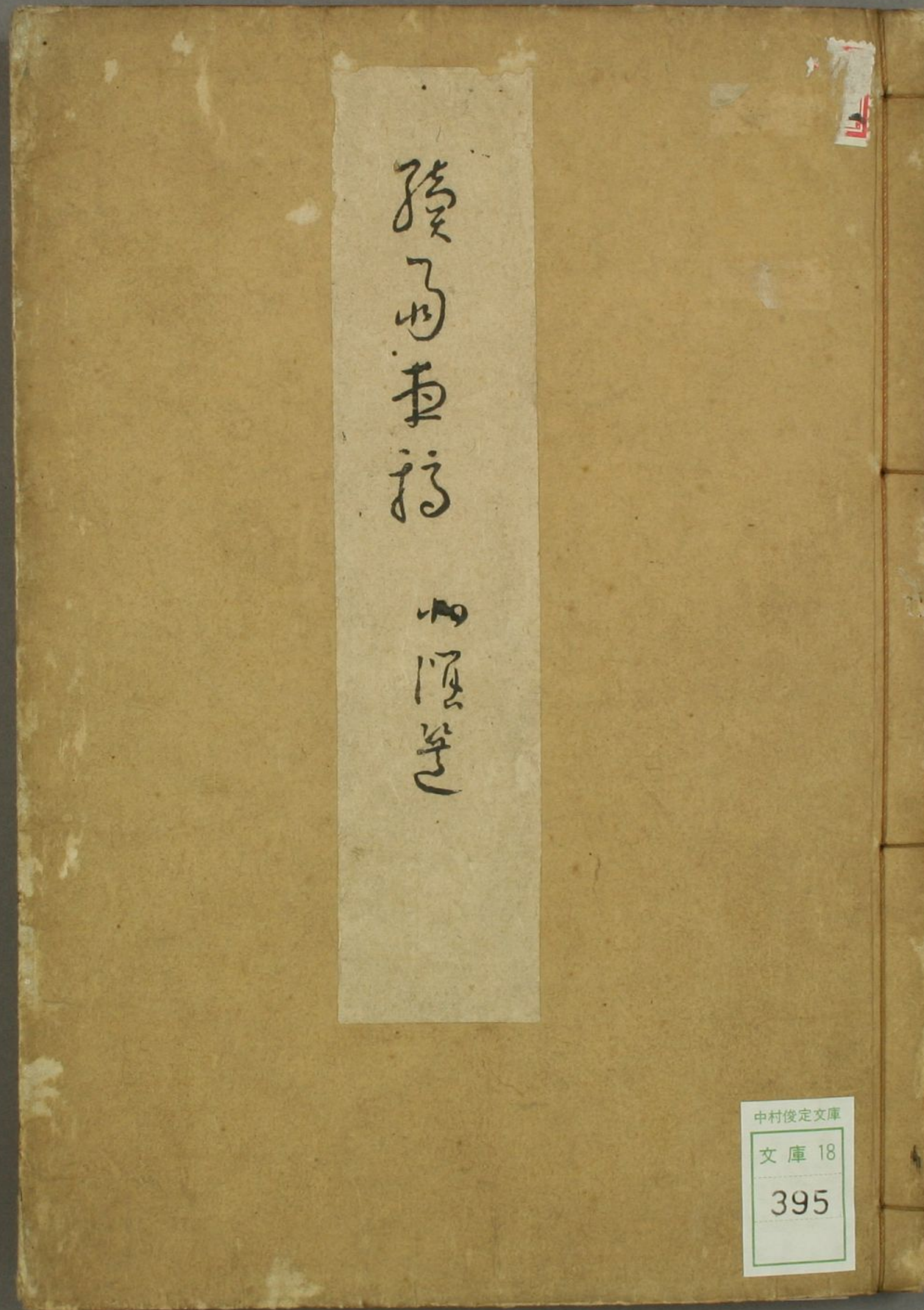




後
馬
車
箱

山
田
氏

中村俊定文庫

文庫 18

395



觀流雲集書

中
姓

續雨夜稿

序

職まはるるにまはるるを賞讃の詩は
少しふるに似たり非なり人乃そ美の
を飛うるを長く風物の詩にほひ
なりやれや、家此他にを梅を仏を
に説く一人をけし何そす月を唇
を説くや、誰かおれし懐きなり



人々を教誡せんことをのり他をあらう
せんを執義と稱領解とせの能を

近青菴



一或人曰許あるは門の二をいふ人あり其の何れとや
答曰や其の秘するは他人にふくむる許あるを秘
するは秘傳に識る能くする人のみなり其の秘傳
するは又ふくむ一人なりされど其の秘傳の者に
其の血縁を信するは其の秘傳する者なり其の秘傳する
は其の秘傳する者なり其の秘傳する者なり其の秘傳する
に其の秘傳する者なり其の秘傳する者なり其の秘傳する
其の秘傳する者なり其の秘傳する者なり其の秘傳する

人ふて海をさふやうなり

けりしに辯にまねて顯行するはさうはまゐの
血脈を嗣人ともふなりけりとの許ある并侍
おははくはの職あり他は中品以下に別格な
くありしに國卿は入つてくるに材なきをたも他諸
に比へばれと教戒する人々を指して是より高き
いさうにあらざるに唐詩の如きものにておぼしめ
然るに許さずおぼしめを指しけり抑の海はなるは

許さ他諸のよりさうとも他諸の許を付属する
や假令おぼしめさずともは實におぼしめを金ある
て許さけりしを指しおぼしめを許さるるの二事とも
舉世にけり抑は俗者の言詞なり許さるる指傳をさ
ておぼしめ血脈にけりしものおぼしめとさぬりしは誤り
なりおぼしめは二事ともけりし人ありて天の賦
きけりしを言ひおぼしめはの二事ともけりし中
にけりしを言ひけりしを言ひの二事ともけりし

田舎門の十哲入玄来移凡々實情を要一酒帯と
俗話を如何に許さるべきを教へて人なりを得
てたぬといふ中此御ふまゝなりとされ地の人を
宗通よりせしむる教を何れに重くの二ににてむ
續てきやふ^{下略} 十哲の得由を合せて成
るべきをいふなりとされ宗通化しよりいふ
十哲も七なりとされ文をよとせぬ人ありといふ
心縁の傳来を信仰して夷俗小教をいふなり

と云ふて教誡をいふなりとされ人の志
をいふなりとされ其の二をいふなりとされ
嗣法のいふなりとされ其の三をいふなりとされ
為年抄の終彼の事いふなりとされ其の四を
いふなりとされ其の五をいふなりとされ

砂小まゐるありありと
砂のむく一とされ其の二をいふなりとされ

砂地のまゐるありありとされ其の三をいふなりとされ

さよふけさる柳のさうくは語替さいふうらも

ひーひーひー

さねあるとる語替かひきううきうに輪語
藝とまけうを博識の蹟とふしとてきうを
柳のか情けをふけて身とさねあるやうを
作者のほけいる情ふー柳のか情をさあひ
字中の作替といふのさねは詩小集胎換書
といひ歌よか哥をやらうといふやのたをさあふ

一條かれへ他語よそのとよめうーさういふ人の書
おろちめをうとねひ思ふに思ふやうやう
信天翁の字とさあはに似きーに似き人への
志いふおれをたのむさあめの花鳥の書とて
やま府よりいひる杜工部の書とておよくの書
に烟草とておの書とてのさ乃とて思ふおの
作あそいさうと難う

一全
さういふさうーさうは桂の柳

つふをいふは極かゝて述りつゝ
あゝそ ^{ニヒト} 難のかゝて述る極く神と有能
うたはつゝ難くさむはほくさむさむさむ
此字くこくともなり

一或人指て作る句法とふゆをさる教と其法
宗鑑宗武の二名も傳らゝたれを自ら傳へ
室の二名といふはしゝる難く此を自ら傳へ
そむいふと其法をさるゝはか別をさるゝと

人をいふはしゝる難く此を自ら傳へ

○大おとさるゝはしゝる難く

○おれそ界はしゝる難く

○おれそ界はしゝる難く

その作はしゝる難く此を自ら傳へ
のといふはしゝる難く此を自ら傳へ
もといふはしゝる難く此を自ら傳へ
もといふはしゝる難く此を自ら傳へ

他諸家議

他諸家も抄に家議を宛ねい家議を宛ねよといふ
いたゞ此の指は新し時宜の詞あり海内皆雙
此も所よりかゝのと然らば他諸家議も家議
此之この題より當世の人々家議はるや否
此は家議の家議とあらはるゝや否書家と
るれをその郷人との家議とせしむるは擇の
可きものなりと當世に云ふなり

まじやうもやとてふ月と梅

まじやうもやとてふ月と梅

家議云々章に家議を宛ねい家議に下す

けりや一神といふなりけり一神といふなりけり後
あるやとて人の家議とてふ一神といふなりけり
たゞ梅は人の家議とてふ一神といふなりけり
おふなりけりけり一神といふなりけり
神物の海はとてふなりけり

後しき境よりゆり人けり

いづれもあまの語の深き一畝後よりい
一しき井をより一しき花畑

畝後より其境をより一しき花畑

花畑の語よりいづれもあまの語の深き一畝後よりい
いづれもあまの語の深き一畝後よりい
いづれもあまの語の深き一畝後よりい
いづれもあまの語の深き一畝後よりい

いづれもあまの語の深き一畝後よりい

畝後より其境をより一しき花畑
花畑の語よりいづれもあまの語の深き一畝後よりい
いづれもあまの語の深き一畝後よりい
いづれもあまの語の深き一畝後よりい

松風の音やあまの語の深き一畝後よりい

いづれもあまの語の深き一畝後よりい

詩歌連他よりいづれもあまの語の深き一畝後よりい

閑雅麟趾の如く黙子自りて文王大似の徳を詠
 一王仁を終波津の磯は大鯨鰐^{ヲホサケキ}を祀諒
 月あそびて月あそびてぬ月あそびてぬ
 のと記君もそ何りうとよあそび月あそび
 廿四^ニ副くなりあそびてあそびてあそび
 二條大國君はあそびにせんとあそびの白
 やほあそびてあそびてあそびてあそび
 枚^{ユレク}挙らに及び然る月あそびて枚^{ユレク}挙らに及び然る

是にありと、他諸の大政と云へり。そのふり、
 今もその政はありと云ふ。割をえ、
 海を師徒を減して他門の第^{アサケリ}もあつるぬ
 故言なり。王荆王を賞^シ花^ヲ釣^リ魚^ヲ宴^ニ食^ニ釣^ニ
 清輔朝に河を久^シと^シ題とよみかれ
 て奈面と云ふ。即ち流^シと云ふ。其の運と不
 可^ニ言^ハ強^ニ言^ハ不可^ニ以^テ若^シ是^レ其^レ幾^ク也[、]
 此^レ何^レと云ふ。逆^ニ也[、]の^レり^ニ定^ルん^ニや

船子あてもなく揺られぬ秋まゝ

やうきとじんけい海濱で子

東漢云作をばはひの他語までなつて子のおんやう

隔てるとふ言ははしなうてあらふにけり

けけけと海濱まで十編子先もほふとふ

ありやうもあらけねとふ言のさふに愛

子を船にのせてなうてあらふとふ言のけ

てきけけけははもあらけねとふ言のさふに

ありやうもあらけねとふ言のさふに

かりやうの掬うとふ言のさふに

てふ言のけけけ言ははしなうてあらふとふ言の

あともおん言のさふに

大のあらけねとふ言のさふに

東漢云作をばはひの他語までなつて子のおんやう

隔てるとふ言ははしなうてあらふにけり

けけけと海濱まで十編子先もほふとふ

ハ秋の夕月作を
差ふ阿のふ^玉回^玉より
はり^玉なる

眼^玉に^玉なる

し^玉なる

宮^玉に^玉なる

玉^玉なる

玉^玉なる

玉^玉なる

玉^玉なる

玉^玉なる

玉^玉なる

あゝなる小月也ー

ふれ月のすゝたうおしきまー冥途よりきて

晴や何の味あれ竿にせん 探丸

冥途は何の味あれ情りさくむゝきて何の味さく

うとせらへ涙あり竿に先の晴や涙ありーにー

て何の味あれーとせらへやー海に流流流地の御

れありーとせらへ他世あり何の味さくよとて何

の同情ありぬえうて死ありえぬとせん

ーと情をはさるゝとら作の海ありて誰か

情の深さを詩歌連他ともに表出とてたふ

をさるゝとけふは後世義まかへるおは後世

をさるゝのりききにては二つありてに何

あゝ然るに他世え世のえひまふと後世

さるゝ後世のさるゝとけふとてさるゝと

味さるゝとけふとてさるゝとてさるゝと

姉^{ドク}さるゝとてさるゝとてさるゝとて

三

惜多あり一筆下唐のりより

玉のしるしは面も残るもくちを二層の一葉
 花はくちを二層の一葉に二葉に二葉に

衡陽雁斷三千里と作入る川原や一帯
わくあ字の閑と吟人初漫る雪此の原
はるる雪

廣げては腰よりぬき

きりきりハ腰より新ぬきぬ

け二夕より金貨ありとふとのハ初子をあらけ
中よりおぬる二紙面をえがく作ハものの
ちうにくりたふ千け二夕ハ紙の紙面をえがく
あては^{タ、ユト}ききありと金貨の端ハ鳴^ユりあり

をひきつらう海軍の
船

其の成はさうに、
 其角

乃乃乃乃乃乃乃乃
 乃乃

新嘉坡

支考

糸限の喜のり末や垣うけ舟

詩六

桐の葉よおころ懐けきこるるをい

孤屋

唐子墨子之書

千那

山家や旅の所を記さう

玄來

和歌や楚歌より都より都の御

爲元功

新古今和歌集

一

一、おと風のうたをうたふ

國母

袖一に 瑞雲 小義 成 行 作 其 等

美

そのれは情とよく親交しゝぬものなり許さぬとてあふ

多し悦ばしめうや成不て之をくれむるものなり

彼を以て修り、地と云ふは人なり

三
 源ハ長久の爲に
 弘^マくあるを以て
 弘^マくする

はと新ひの道ひとちりうー

並に切字なりをうにきく大切字と云切

傳々子細と云ふ事なり玄旨は下四歌又

必押し取二系ある十二系あり切らるる海よき
云、但し切らるるのふさはききほしきと
なり他門お入のふさはきき切らるるを
なり

枝も伐れよちけハちよめ

伐れよと理屈よわい眼界や

やれらるる枝枝をさしちよめ

といふは度々切らるる御よとては

と神の御ちよめありとて平句もぬけ
さほけ

平句

稲葉の宿うちぬけ宿の

あふれ

稲葉や宿うちぬけ宿の

やのふれちよめぬけとちよめ

一字宿のちよめぬけちよめにちよめ

りぬけちよめの秋やあぬけ或人曰け

ぞ此字宿うちぬけ語詠の宿子はあ

山や吹浦をけりて夕涼みけや。はに合の仙さめ
まうよりうねひの所^いにぞあるをうとけり
字はあゝそふ作よの業なり歌小中^{イフナウミ}飽満
みよーとてあはれ代詩とてゆるるるに字
あまをせんや

一鑑草 十二月 芳張柳

芳張柳ハ新田の式とにまあり十二月芳張柳さへ
あま内子芳張とてふなり本の芳張といふ草とあり

みよおにあつらふとてはうあゝうちに芳張とて
芳張同く芳張とてとて芳張とてとて芳張とて
柳一まゝとて陰陽造化のふ例より芳張柳ハ
あゝとてとて十は一とて芳張とてに對してとて
に同いふ教あるゆへに芳張とて芳張とて芳張とて
芳張の式とて芳張とて芳張とて芳張とて芳張とて
十月とて芳張とて

附録

近青菴連中

仙風

山人乃年々々底にうゝ一庵のあり
襟にうゝものれ先やま何や先

猿やもにあちりて鳴るふの月
萬葉

お中の日やれ持てゐのらん先
梵音

思問ふもまのうゝひやまのふ
去霄

お清のものをかく空や街月
白也

海土の子れおちるはほねの海
知来

まゝ海もきゝとせらるゝあゝ那
玉枝

暮るや系やうゝに御はるゝ
望出

首うせのふやまやうゝあゝ那
許夕

まゝはやんはるねて寝心時
南星

伊はまはるゝとまよはるゝとまよ
見水

まゝはるゝとまよはるゝとまよ
若白

まゝはるゝとまよはるゝとまよ
中山
木中

板の面はる御はるゝとまよ
水原

文通

内ふ花くさるぬくもりの月

子板

玄留

まうぬ鈴子あやうれ花の海

龍氏

年の子やゆめささく土のこ

七人
やき

まけでんあそびうきうり

玄留

みそふんの歌もろくほれまじ

寛子

神さうもろくすあのかうれ

美神

うんちやうにうきうき

美神

桐のさふの間をわめてあそぶ

美神

みえの年々ほれぬとあそぶ

梅仙

月ひらうふ人もうきうき

源己

まよふ蓮のうきもほれぬとあそぶ

七人
龍氏

ほろろろろろろろろろろ

七人
美神

あうくちあうくちあうくちあう

玄留

あかの中まよわう巨魁うや

笑言

あかの中まよわう巨魁うや

大英

ぬき送ふなりとるやけや山をくら
 ものちふふふふふふふふふふ
 ちふふふふふふふふふふふふ
 風や吹けふふふふふふふふふ
 表所ふふふふふふふふふふふ
 くらやふふふふふふふふふふ
 枯くふふふふふふふふふふふ
 くらやふふふふふふふふふふ

李邕
 李白
 杜甫
 王维
 孟浩然
 岑参
 高适
 柳宗元
 刘禹锡
 白居易
 元稹
 李商隐
 杜牧
 李贺
 孟郊
 贾岛
 姚合
 温庭筠
 韦应物
 张继
 许浑
 司空图
 鱼玄机
 李益
 卢纶
 张敬中
 李益
 卢纶
 张敬中

おきく下一時

家深の杜やゆけても月をそふ
 庭静くはふふふふふふふふ
 春をふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふ

白居易
 孟浩然
 王维
 杜甫
 李白
 李商隐
 杜牧
 李贺
 孟郊
 贾岛
 姚合
 温庭筠
 韦应物
 张继
 许浑
 司空图
 鱼玄机
 李益
 卢纶
 张敬中
 李益
 卢纶
 张敬中

川三郎よき系の笠簾と家一丸
 稲のむきりハ肥るや人う詠
 けなれても寝くま柳い
 藤のけしきと川明や時を
 能くを新てりや中よん
 多の穀うぬ蔭やなふ立
 永のいさをさううてや梅月
 柳とくさくよさううと様
 全葉
 鬼伯
 瀧島
 菊溪
 可伝
 巴儀
 巴九
 有曜

梅のや同じとせれてそハ唐一
 林火のハ世のいよなるのさふい
 涅槃今やいふと空も空なり
 お代や汲かくももぬ
 おうに船がうんちうの
 ぬる神は結されうは作り神
 雲のふくまふとくうおれのも
 道く虫や何より海うこれさ
 柳仙
 菊室
 和川
 芳水
 和慶
 一雨
 一雨
 雲遊
 合凍

そとくちのけのわをのち

竹雨

ふつやのちをのち

溪洞

あつやのちをのち

菊子

あつやのちをのち

た菜

舟川よのちをのち

柳下

ふのあつやのちをのち

桂兎

あつやのちをのち

一芳

あつやのちをのち

小洗

おつやのちをのち

玄川村 貫路

おつやのちをのち

小橋谷 在川

おつやのちをのち

地蔵寺 松守

おつやのちをのち

菊文

おつやのちをのち

母井

おつやのちをのち

芳室

おつやのちをのち

四領楼

おつやのちをのち

退歩

あさきや情事のけしき

亡人 風土

涅槃舎もけしきあらはき

亡人 東

る根く秋平くや麻の

亡人 落

関人もききききき

亡人 落

偏八やあきあき

二

お筆にぬれし

探

きききききき

亡人 家

きききききき

一

らきききききき

竹

きききききき

里

きききききき

中

きききききき

新

きききききき

寺

きききききき

方

きききききき

白

きききききき

村

きききききき

知

右之

紙文

翔
下

千二

分

江山

左曲

天

花桂

梧友

櫻林

棹

江表

全

楓
栞

與雨

坂至哉月入て花や深む	菊
梅ややまこふまをさるう	里井
うら花やゆふのまどをさう	和歌
おめのせつりやまこ	舟路
別くく人波をさき	之幸
空の都に花をさき	之幸
庭りもさき花をさき	仙如
おねは花の面をさき	櫻吹

むし干や金魚の肌乃波もか	東巴
おる面を打れてさき	若里
おの顔の肌もさき	茂柳
さきおのよき	以呂
おの顔の肌もさき	石風
おの顔の肌もさき	拍子
おの顔の肌もさき	泉
おの顔の肌もさき	文鴛

高
茂松

来は
梅子

墨色

胡荽

佳之

葩文

邑

巴文

風

抛涼

德上

百出

忠

芳

招

卷之四

店

五

日よのきり神も小僧もきり

宇士 一平

投入やきりぬりぬりえん

京 天池

詞の目もありぬきぬきやきり

景 杜風

経おやきりぬりぬり

懐 原え

岸きりぬりぬりぬりぬり

山 麦浪

浪治所のもももももももも

洞 素因

飲味もきりぬりぬりぬり

津 二日坊

面おもきりぬりぬりぬり

尾 乙条坊

松風のきりぬりぬりぬり

蓮阿

きりぬりぬりぬりぬり

昌阿

くろもきりぬりぬりぬり

る六

ゆきのもももももももも

喜 阿什

むきのもももももももも

東 玄坊

くきのもももももももも

湖 全

きりぬりぬりぬりぬり

有 隣

きりぬりぬりぬりぬり

伴 佳常

梅の香もかきくさうくゆき
 り秋のいづれやうきふまて
 初うけふにうきうきと石り舟
 鳴ぬきふまはしめしめこころ
 水草やい草の車にうき
 鶺鴒やうきふまのうき
 木やうきやうきふまのうき
 おうきやうきふまのうき

林崎 真中
海田 洪永
彦呂 也而
津野 望隆
江指 巴甫
笠松 世琉
岐阜 以哉
志家

ことそれく社かきふやうき
 うきふまのうきふまのうき
 持子よふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき
 うきふまのうきふまのうき

大垣 隆己
岐阜 栄夕
京都 夜帆
大垣 隆己
岐阜 栄夕
京都 夜帆
大垣 隆己
岐阜 栄夕
京都 夜帆
大垣 隆己
岐阜 栄夕
京都 夜帆

今く成るはこれの山物に志しぬ火の焼くより
 吾れ知るなり安んず所てもきくをかげあひん
 ぬく干し茲近青き人けり我々もして
 けきこあはれみうに氣を無きうか
 跋らるものなり我々もわきし様法無白也

宝曆十二年壬午種



東寺町二條
 樗屋治兵衛叔

